

文部時報

第1133号

昭和46年11月

青少年と文化 大島 康正 2

▷座談会△

青少年の文化活動の現状と展望 11

(出席者) 林部 一二・栗原 一登・森 正

友井唯起子・杉本義智夫(司会) 吉里 邦夫

青少年と演劇 浅利 慶太 36

地方における青少年の文化活動 井上 武弘 41

青少年と文化財愛護 宮野 礼一 48

青少年芸術劇場の実施について 土生 武則 55

学校教育と芸術文化 赤木 慎平 61

~~~~~

〔現地ルポ〕 ⑯

県民オペラ・サークルの活動 ..... 田村 卓夫 68

〔隨想〕

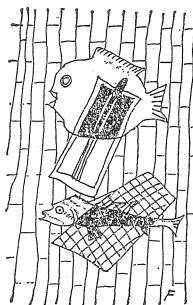
教え子のことなど ..... 伊藤 忠二 74

〔教育研究所紹介〕 ㉓

長崎県立教育研究所 ..... 兼俵 恒治 78

〔連載第42回〕

人物を中心とした広島県教育郷土史 ..... 吉久 繁一 85



# 青少年芸術劇場の実施について

土生武則



## 青少年芸術劇場の趣旨と経過

青少年の教養を高め、人間性を豊かにすることは、ひとり青少年のためばかりでなく、国家社会にとっても極めて重要なことである。教養を高め、人間性を豊かにする方法はいろいろ考えられようが、優れた芸術を鑑賞することは、最も適切な方法の一つであろう。

若い世代に優れた芸術に接した感激は、その人の長い人生に何物かを与えないではおかしいであろう。事実そうした経験は、多くの人によつて語られているところである。

しかし、芸術とくに舞台芸術を鑑賞する機会は、そう多くないのが現状である。

文字を鑑賞するためには、本を購入すればよいし、図書館も随分と整備されている。美術は美術館で鑑賞の機会が与えられている。

地方美術館の所蔵作品の貧困は、例えば、文化庁で実施している三代名作展のような巡回展や、地方美術館の特別企画展等が、これを補うであろう。しかし、舞台美術だけは、公演団体が中央に集中していること、地方にこれら公演を行なう適當な施設が少なかつたこと、地方公演が経済的に困難であったこと等が禍わいして、特に地方における鑑賞の機会を少なくしていた。幸い、県民会館等の施設が近年急速に整備され、また観客組織も充実されるにつれて、この傾向は徐々に改善されて來てはいるが、未だじゅうぶんといえない。

したがつて、青少年に対し、優れた舞台芸術を鑑賞する機会を積極的に提供する事業が必要となつて来る。このことはまた将来芸術を愛し、理解する国民をより多く作ることとなり、引いては我が国芸術の発展にも連る。何故なら全ての舞台芸術は、良い観客によってはじめてその成果をじゅうぶん示すものであるからである。

昭和四十一年文化局ができる、先ず考へられたことがこのことであつた。

生のものを鑑賞する機会をより多く青少年に与えよう、優れた本ものを提供しよう、」として昭和四十一年度はじめてこの事業は実施された。オペラ（東北地区）、新劇（四国地区）、能・狂言（九州地区）、文楽（中国地区）、落語・講談（北関東地区）の五種目、延べ二十五回の公演であった。暫定予算であったこと。はじめての事業であつたこと等のため計画がおくれ、会場の確保に難儀し、趣

表 I

| 種目分野   | 昭和四十  |         | 昭和四十     |          | 昭和四十     |          | 昭和四十     |          | 昭和四十     |       |
|--------|-------|---------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-------|
|        | 二年    | 三年      | 四年       | 五年       | 六年       | 七年       | 八年       | 九年       | 十年       | 十一年   |
| オペラ    | 東北地区  | 四国地区    | 中部地区     | 九州地区     | 関東地区     | 北陸・中部地区  | 北陸・中部地区  | 関東・四国地区  | 中国地区     | 北関東地区 |
| 新劇(1班) | —     | —       | —        | —        | —        | —        | —        | —        | —        | —     |
| 〃(1班)  | —     | —       | —        | —        | —        | —        | —        | —        | —        | —     |
| 能・狂言   | 九州地区  | 東海・近畿地区 | 中国地区     | 北海道・東北地区 | 東北・北海道地区 | 東北・北海道地区 | 東北・北海道地区 | 東北・北海道地区 | 東北・北海道地区 | 東北地区  |
| 文楽     | 中国地区  | 四国地区    | 東北・北海道地区 | 東北地区  |
| オーケストラ | —     | —       | —        | —        | —        | —        | —        | —        | —        | —     |
| 落語・講談  | 北関東地区 | —       | —        | —        | —        | —        | —        | —        | —        | —     |
| オーケストラ | —     | —       | —        | —        | —        | —        | —        | —        | —        | —     |

青少年芸術劇場はどのような形でどのようなものが行なわれているか以下その実際を記述してみたい。

先ず（主催）であるが、文化庁と開催地の都道府県教育委員会が共催し、必要により都道府県、市教育委員会、市、公立文化施設がこれに加わっている。

（経費）は、公演費、公演者の旅費、解説者の謝金およびその旅費、ボスター、プログラム、チラシ等の印刷費、職員の旅費等を文化庁が負担し、会場費、会場設備費、宣伝費、入場券等雑印刷費、連絡旅費その他の開催地元が負担することになっている。

（対象）十四歳から十九歳までの青少年で地元共催者が選考した者を、無料招待する。もちろん引率者や、指導者等関係者も含まれる。

（開催時期）は七、八月の学校の休暇時とし、昼間公演とする。青少年が参加しやすいためである。また、比較的芸術家の暇な時を選んでこれら芸術家の協力を得やすくするという配慮も含まれている。

旨の徹底その他に、準備不足もあったが、まづまづの成功であった。昭和四十三年度は、落語・講談にかわったオーケストラが登場、五種目二十六公演が行なわれ、四十四年度は、新劇が二班に増加、六班三十三公演が実施された。四十五年度三十五公演、本年は三十八公演（但し、一公演は水害のため中止）であるが種目分野別の巡回地区は、表 I のとおりである。

### 実施の概要

（演目・出演団体の選定等） 演目、出演団体の選定、プログラム執筆者、解説者の選定は、各部門別に企画委員会を設けて行なっている。演目は、青少年向きのものというよりは、むしろ、それぞれの分野の名作、代表作であって、青少年が教養として鑑賞しておいてよいと思われるものを選ぶこととし、出演団体はこれと併せて選定している。部門によっては出演者に青少年の共感を得るために、若手を起用する等の配慮も加えられている。

プログラムは、作品解説、出演者紹介のほか、隨筆等を加わえて理解と興味に資し、また公演に当っては専門家の解説を行なっている。実施して来た各部門の演目等は次のようにある。

（オペラ） 昭和四十二年の当初から「蝶々夫人」が選ばれている。「カルメン」や「椿姫」とともに日本でよく知られたオペラであり、舞台の制約やその他を考えて、最も適切なものとして選ばれた。

音楽監督森正、演出栗山昌良、蝶々夫人には砂原美智子ほかが当たり、オーケストラは東京都交響楽団（本年は京都市交響楽団）が出演、二期会、藤原歌劇団が協賛している。

（新劇） 理想的に言うならば、適當な演目を選定し、これを上演するに最も適した劇団に委嘱するのが最良であろう。しかし、そうするためには、製作費や舞台装置、練習に費やされた経費を全部負担しなければならない。このことは、一部門十回以下の公演である現状では、経費的に非常に割高である。したがって演劇部門では、各劇団に青少年芸術劇場に出演可能な演目と配役を求める、それらの中から企画委員会で選定している。四十二年度は劇団「雲」による「ジユリアス・シーザー」、四十三年度は劇団「仲間」による「檢

察官」、四十四年度は劇団「民芸」の「島」、俳優座の「ワーニャ伯父」、四十五年度は劇団「青年座」の「夜の来訪者」と劇団「俳優小劇場」の「わが町」、本年は劇団「俳優座」の「ハムレット」と「民芸」の「星の牧場」が選ばれた。

（能・狂言） 狂言二番、能一番が組まれている。能は「葵上」が当初から続いている。ある会場で修羅物で、もっと解り易いものを選定すべきだというような意見も出されたが、もっとも能らしい能として一番を選定するとなると、この曲が最も適当のようである。狂言は「武悪」が当初から続いている。最初に演ずる狂言は四十二年が「柿山伏」、四十三年以降は「神鳴」が選ばれている。出演者は、観世、金剛、喜多、宝生、金春の五流が順次出演、狂言は和泉、大藏が交互に出演している。なおこの部門は能楽協会が協賛している。

（文楽） 四十二年度は、「傾城反魂香（けいせいはんごんこう）」と「雪翁々婆湖（ゆきはこんこんすがたのみずうみ）」、四十三年度は「平家女護島（鬼界ヶ島の段）」と「新版歌祭文（野崎村の段）」が選ばれたが、四十四年度からは「曾根崎心中」と他に一篇（「本朝廿四孝」、「伊達恋絆麗子」、「一谷嫩軍記」）が選ばれ、文楽協会協賛のもとに実施された。

（オーケストラ） 四十三年度から加わえたオーケストラは、楽団演奏のほかに独奏または独唱が組まれている。四十三年度は「エグモント序曲」、「管弦楽のための木びき歌」、「バイオリン協奏曲ホ短調作品六四（マンデルスゾーン）」「組曲展覧会の絵」で、読売日本交響楽団、指揮者山田和男、バイオリン小林武史であつた。

た。四十四年は「バイオリン協奏曲」のかわりにモテロト「踊れ、喜べ、幸いな魂よ」が入り、独唱は伊藤京子であった。四十五年度はベートーベン生誕百年記念として「レオノーレ序曲」、「ピアノ協奏曲第五番変ホ長調（皇帝）」「交響曲第五番ハ短調（運命）」のベートーベンの諸作品が演奏され、日本フィルハーモニー交響楽団を近衛秀磨が指揮した。ピアノは小林仁であった。

本年は「歌劇ルスランとリュドミラ序曲」、モーツアルト「フルートとハープのための協奏曲ハ長調作品二十九」それとドボルザク「交響曲第九番（新世界）」が山田一雄指揮による読売日本交響楽団により演奏され、フルート、ハープはそれぞれ小泉剛、永廻（ながさこ）万里によって独奏された。

（能の舞台） 同じ舞台芸術でも、能は原則として能舞台で演ずるものであつて、一般的ホールで演することは少ない。したがつてホールの舞台でどのようにしてその雰囲気を出すか、いろいろ問題のある所である。青少年芸術劇場では過去の経験から、次のような舞台を構成している。すなわち処作台を能舞台の広さに並べる。橋懸も同じであるが、舞台の制約があつて長さは十分にはとれない。香欄と目付柱は青竹を用い、うめ込にして安定させる。背景は金屏風として黒幕で仕切る。一の松、二の松、三の松を香欄の前に立て、あげ幕をつるす柱を立てる。舞台によつては反響板を利用し、屏風が二双ある場合には橋懸の背景にも利用する。（日本舞踊のための松破目は使用しない）幕を上げっぱなしにする。等で、反響の点でじゅうぶんではないが、簡素で、能舞台の雰囲気をある程度出せるようになった。

#### 開催県の受入れ措置

青少年芸術劇場の開催に当たつては具体的にどのような措置がとられているか、本年度各開催県からの報告をみてみよう。

まず会場であるが、原則として一、〇〇〇名以上を収容し、冷房のある会場を選定してもらつてあるが、県によつて施設の相違があり、本年は愛知県の最低七〇〇席、京都府の最高二、二三〇席となつている。

もっとも愛知県は、能・狂言の公演で、折角熱田神宮に能舞台があるのでこれを利用したためで、平均会場の客席数は、約一、五〇〇である。

地元主催者は、各学校等に招待券を割当、あるいは公募して申込を受ける。大半の県が併用しているが、割当のみの所もある。割当と公募のどちらが確実な入場者になるかは一概に言えない。割当の中にも一応申込を受けて査定の上割当を行なつたもの、あるいはその一處の申込が学校等の目算によるものか生徒の実際の希望によるかによって違つて来る。単に学校に割当ただけでは安心ができない。また一般公募だけにたよるのも危険である。

入場者総数は三九、五四四人で一會場当たりの平均入場者数は、一、〇六八人であるが、これを各種別にみると、表IIのとおり、一會場当たりの平均入場者数は、オペラの一、四〇九人、次いで、新劇の一、一八九人、オーケストラの一、〇七四人、文楽の八〇七人、能狂言の人〇〇人という順になつてゐる。

公演前のPRには、ほとんどの県が新聞を利用している。文化庁でもポスター、チラシを用意したが、地元が独自にこれを印刷した所が半数以上ある。

#### 青少年はどう感じているか

各会場において青少年から鑑賞後のアンケートを取つた集計が表IIである。種別別に平均値を出してみると色々のことが解る。鑑賞して「感激した」、「楽しかった」が全体の七〇・七%、種別にみると、オペラ、新劇は両者ともに八一・七%が、楽しく感激して鑑賞していることを示しているが、特にオペラは六四・六%が感激していることは、他の種目と比較して注目される。

「むずかしかった」は当然ではあるが、能・狂言および文楽に多い。もつとも十四歳の中学生では無理のところがあるかも知れない。それでも「理解できなかつた」は両方とも一〇%どまりで、むしろオーケストラが一二・四%と割合に高い。

これまでにその種目の生の公演を見たことがあるかどうかの間に對して「ある」が三八・一%あったのは意外で、生のとことわつているが、例えればテレビやラジオ等を通じてのものも若干は含まれているような気がする。

「今後見たいと思うもの」はオーケストラが最高で、新劇がこれに続いている。実施していないバレエが各会場平均して要望されていることは注目される。歌舞伎の七・七%も今後考えなければならない問題であろう。

表II 昭和46年度 青少年芸術劇場アンケート集計表

| 種<br>目 | 入<br>場<br>者<br>数  |                           | ○○を鑑賞して                    |                       | ○○の内容について                            |                                  | 生まの○○をこれまでに<br>見がたな<br>こと                 |                  |      |      |      |      |
|--------|-------------------|---------------------------|----------------------------|-----------------------|--------------------------------------|----------------------------------|-------------------------------------------|------------------|------|------|------|------|
|        | 入総<br>場<br>者<br>数 | 一均数<br>会入場<br>者<br>平<br>者 | 感<br>激<br>し<br>か<br>っ<br>た | 普<br>通<br>だ<br>っ<br>た | む<br>か<br>つ<br>た<br>ま<br>ら<br>な<br>し | つか<br>つ<br>た<br>ま<br>ら<br>な<br>し | 少<br>し<br>で<br>き<br>た<br>理<br>解<br>可<br>能 | 理<br>解<br>可<br>能 |      |      |      |      |
|        |                   |                           | 64.6<br>1409.8人            | 17.1<br>81.7          | 10.4                                 | 6.1                              | 1.8                                       | 38.2             | 58.4 | 3.4  | 28.1 | 71.9 |
| オペラ    | 7,049人<br>(5会場)   | 1409.8人                   | 64.6<br>1409.8人            | 17.1<br>81.7          | 10.4                                 | 6.1                              | 1.8                                       | 38.2             | 58.4 | 3.4  | 28.1 | 71.9 |
| 新劇     | 16,647人<br>(14会場) | 1189.1人                   | 49.4<br>1189.1人            | 32.3<br>81.7          | 11.7                                 | 5.9                              | 0.7                                       | 45.4             | 50.8 | 3.8  | 46.6 | 53.4 |
| 能・狂言   | 3,201人<br>(4会場)   | 800.3人                    | 17.3<br>53.4               | 36.1<br>53.4          | 22.3                                 | 19.5                             | 4.9                                       | 28.1             | 62.8 | 9.2  | 35.8 | 64.2 |
| 文楽     | 7,275人<br>(9会場)   | 807.9人                    | 33.9<br>63.7               | 29.8<br>63.7          | 12.9                                 | 19.6                             | 3.8                                       | 25.6             | 66.9 | 7.6  | 30.4 | 69.6 |
| オーケストラ | 5,372人<br>(5会場)   | 1074.4人                   | 39.2<br>73.2               | 34.0<br>73.2          | 22.1                                 | 4.4                              | 1.4                                       | 31.5             | 56.0 | 12.4 | 49.4 | 50.6 |
| 総 平 均  | 39,544人           | 1068.8人                   | 40.9<br>70.7               | 29.8<br>70.7          | 15.8                                 | 11.1                             | 2.5                                       | 33.7             | 59.0 | 7.3  | 38.1 | 61.9 |

・今後見（または聴き）たいと思うもの

|          |       |        |       |         |      |
|----------|-------|--------|-------|---------|------|
| 1 オーケストラ | 20.2% | 4 オペラ  | 15.7% | 7 邦樂・邦舞 | 4.4% |
| 2 新劇     | 19.7  | 5 歌舞伎  | 7.7   | 8 文樂    | 4.1  |
| 3 バレエ    | 18.9  | 6 能・狂言 | 7.2   | 9 その他   | 2.0  |

## 今後の問題点と展望

趣旨の徹底をどうするかが重要であろう。

(題目、内容の問題点) アンケートの結果でも明らかかなようにバレエの要望が強い。歌舞伎と邦楽邦舞の組合せも可能であろう。とは言つても要望が少ない能・狂言および文楽を廃止すべきだとは考えられない。むしろこの優れた伝統芸能を積極的に見せる姿勢が欲しい。青少年芸術劇場の題目は、青少年に是非見させたいものと見たいものを提供する二つの面を常に考える必要があろう。時々鑑賞した青少年から直接感想を寄せられるが、他の題目に比し地味な能・狂言や文楽を見た感激を伝えるものが多い。

新劇は前に記したが、現在のように、各劇団のその年のレパートリーを買うのではなく、演目を選定し、(欲を言うならば作品を委嘱して)これを上演するに最も適した劇団を選定して、委嘱するのが本來である。その為には、最低二三十公演を実施する必要がある。

(実施上の問題点) この五年間における各都道府県の文化行政に対する姿勢は、國の行政とも関連して急速に進展をみせており、事業遂行は次第に円滑になっていくことは心強いことであるが、未だ招待の方法等に不安が残る。例えば、学校から六千もの招待希望があり、これを定数までへらすのに苦心したとしながらも当日の出席者が思わしくなかつたという類である。六千の数字がどうせ無料なんだから申込だけはとげといったものなのかどうかを確かめる必要があるであらう。それには関係者との密接な連絡と懇切な

次に対象の問題であるが、青少年を十四歳～十九歳ではあるが、能・狂言、文楽等は十五歳以上が望ましい。中学校の教科書にある

からというだけの理由で、中学生を主体に集めた会場は、落着かなるものであり、引いては演者にも影響し舞台成果は期待できない。

時期、時間の問題についても色々意見が出されている。一学期の試験が終つて終業式前が一番動員しやすいとという類である。確かに

学校単位に引率する方法が一番確実な方法であろうが一会場十二、三百人の会場は、二校分しか収容できないであろう。日曜日でなければ労働者が動員できないのではないかという意見もあった。しかし

たまたま日曜公演になつたが労働者らしい若者はいなかつた県もあり、平日でも労働者を中心に八〇%の入場者を確保している県もある。要は労働者の方法であろう。夜間公演にすべきだという意見もあるが県下から招待する為には帰途の時間を考慮すれば昼間公演が適切である。

一県一か所で巡回することは効率的でないのではないかとの問題がある。確かにその通りで、来年以降少なくとも一県二か所で実施できるような予算を要求中である。

最後に何回公演を行なえば青少年芸術劇場の目的は達せられるであろうか。一つの目安は、十四歳から十九歳までの間に全種目一回は鑑賞の機会が与えられるということであろうが、せめて毎年どの県でも二～三種目の公演を二～三か所で行ない、全國一、二〇〇万人の青少年に、芸術鑑賞の機会を提供することが当面の課題である。

(文化庁文化普及課長)

